研究 No. 0632

小・中学校における住教育の設問設定に関する研究

ー北欧及び英国のシティズンシップ教育を通した方法の検討ー

主査　薬袋　奈美子*1
委員　水上　聡子*2，加藤　優子*3

シティズンシップ力とは生活に必要な知識の習得と同時にスキルが身についていることが必要である。スキルとは、適切に判断し、議論することのできる力、いかに行動すべきかを考えることのできる力を持つことで、特に情報収集・分析、様々な立場の視点、及び対話力といったスキルを培うことが大事である。この点において、日本の小中学校の教科書には限界があると感じた。諸外国の教科書等にある設問を確認すると、詳しい説明のついた教科書の中身にじっくり向き合った後、自分の中でじっくり考えを深め、答えは一つと限らないような課題を議論するという構成が重視されており、これらのスキルを身に付けられるようになっていた。

キーワード：1）まちづくり，2）住教育，3）市民，4）シティズンシップ，5）フィンランド，6）イギリス，7）議論，8）知識，9）スキル，10）学校

EXERCISE AND DISCUSSION SCHEME FOR PLANNING AND HOUSING EDUCATION IN PRAIMARY AND SECONDARY SCHOOLS

— Study based on Citizenship Education in Northern Europe and the UK —

Ch.　Namiko MINAI
Mem.　Satoko MIZUKAMI,　Yuko KATO

Various knowledge and skills to discuss and behave as a citizen are important for citizenship. It is especially important to be capable of collecting and analyzing information, having various points of view and having a good dialogue. We found that Japanese text books for primary and secondary schools are not prepared for citizenship education. In European textbooks, we found that students are first required to read the textbook carefully and understand the content. After reading, students individually work on questions to think deeply about the topics. Finally, students discuss topics with their classmates, criticizing society and sometimes disagreeing among themselves.

1．はじめに

1.1 背景

社会が多様性を持つことを当たり前とするようになり、ライフスタイルも、それを支える住まいの環境、さらには住まいの環境の整え方も多様化している。それは伝統・慣習のみに縛られるのではなく、より多くの人が公平な権利のもとに、民主的に社会が運営され、自由度が高まった証拠でもある。

しかし、日本では、高まった自由度に伴って必要となる住環境を整える力は十分に身に付けられていないのではないかと感じる。したがって、義務教育課程でそういった力を身につけることは、良い住環境を創り出すために重要である。

近年シティズンシップ（市民性）教育に教育界での関心が高まっている。市民として生活するのに必要な発言力、考える力を身につけることを目的としているが、まさに住教育にも必要なことである。これまでにもリテラシーについて妹尾[文1)]らの研究はあるものの、シティズンシップ力の具体的な育み方法は検討が必要である。

1.2 目的・方法

本研究では、シティズンシップ力を高める教育方法を探るために、諸外国の教育方法や学校教育で使われる教科書の設問を分析し、日本での設問設定方法を検討することを目的とする。そのために、①学ぶべき内容を確認し、②現在の日本での学校教科書内容を整理し、現状を確認するとともに、③シティズンシップ力を高める北欧等の教育方法や実践例を集めそこで目的とされている習得内容やそのために利用される方法を広く学び、整理する。その上で④住教育で習得されるべき市民性を高めるための設問の設定方法について検討をする。更に、⑤実際に学校で授業を行い、シティズンシップ力をつける住教育方法の検証を行った。

①②③は主として文献の収集・分析により行った。④は、住教育におけるシティズンシップ教育が熱心であることが文献からわかったフィンランド、及びシティズンシップ教育が学校で体系的に取り組み定着をしてきたイギリスに赴き、文献の収集及びヒアリングを行った[注1)]。⑤は、小学校５年生に２時間授業[注2)]を実施した。

*1 福井大学大学院　講師　　*2 アルマス・バイオコスモス　代表　　*3 福井大学大学院　非常勤講師

2．住教育で学ぶべきこと

2.1 住教育の全体像

住生活は、様々な知識の応用であり、基礎的な知識を使いこなすことで、はじめてより快適な居住環境が得られる。住環境を築くためには、知識だけがあっても難しい。応用する力が重要なのである。

そもそも豊かな住環境の創造は、日々の生活の中で、暮らし方を整えるものであり、自分ひとりの問題ではない。例えば家族の中であっても、考え方、生活時間、関心事の異なる人同士が、空間を共有しながら、共同生活を送るためには、ルールや譲り合いといったものなくしてはうまくいかない。

したがって、①住まいにかんする知識を適切なところから習得し（一時的な、或いは科学的な根拠の無い考え方に翻弄されたりしない）、②客観的に物事を考え、判断することができ（流行や声の大きい人の言うことに流されるのではなく意見をまとめ批判することもできる）、③異なる意見の人（家族／友人）とも協議し、④知識や考えたことに基づいて気持ち（知識を使いこなそうとする意欲）や行動する力を持ち、自らの住環境を良くすることのできる力を持つことが必要となる。

こういったことは単に知識を持てば解決できるというものではない。知識も重要であるが、それを使いこなし、住環境を実際に良くする力（スキル）が必要である。

こうした力を養うものがシティズンシップ教育とも呼ばれている。シティズンシップ教育という言葉はイギリスで盛んに使われているが、他の国では民主主義教育といった表現がされている。ここでは市民として住まい・まちづくりに係わるための力という視点からシティズンシップ教育に求められる内容を整理する。

住教育とは、素材が身近に多くあり、様々な分野の知識を応用して構成され、かつ実際に働きかけることで各々の生活環境が改善される可能性を持つ教材である。近年教育界で注目されているシティズンシップ教育を高める点からも取り組みやすい分野であると言えよう。

2.2 住教育に必要な知識

住教育に必要な知識については、建物・まち・環境といった目に見えるモノについての学習と、社会・制度といった目に見えない仕組みについての学習である。それは全教科の中で取り組まれるべきことである。

1998 年にフィンランドの建築政策[文3)]には、国の教育委員会で、カリキュラム編成にあたって建築教育を強化することが盛り込まれている。特に美術の授業をはじめとし、生物、地理、歴史や政治の中で教えられるべきだとされている。高校生用の美術の教科書には、数十ページを割いて、建築様式の紹介や、数学では建物の形を利用した教育が行われている。建築・都市計画という科目があるわけではないが、諸教科の中で積極的に建築・都市計画教育が行われている。

2.3 住教育に必要なスキル

イギリスのシティズンシップ教育では、相互に関連する三つの領域、すなわち①社会的・道徳的責任（個人の社会的・倫理的責任を認識し、民主主義社会の中における行動を形成し導く、倫理的価値観の理解を発展させる）、②地域コミュニティへの参与（学校社会とコミュニティの両方の関連事項に対し積極的に関わり、有益な役割を果たす）、③政治的教養（代表的な政府組織、政治的・社会的問題について、地域、国、そして地球規模の視野で理解し議論に参加する）を軸とし、学校におけるシティズンシップ教育の達成目標を**表 2-1** のように定めた[文6)]。ここでは、教養を持ち、活動的な市民の育成が目指されていることがよくわかる。

表 2-1　Davies によるシティズンシップ教育の達成目標

目標	教育内容
知識を持った市民になるために必要な知識の理解の習得 ⇒ *シティズンシップに関する教育*	国内外の司法・立法・行政、さらにヨーロッパ連合や国際連合の役割に関わる知識と、社会的な面におけるイギリスの国民（民族）、宗教の多様性の相互理解と尊重の必要性について学ぶ。
探求とコミュニケーションに必要な能力の育成 ⇒ *活動的な市民を促進する手段としての教育*	考察して議論する能力の育成が目的とされている。政治的・精神的・道徳的・社会的・文化的な時事問題について調査し、考察して、個人的な意見を文章および口頭で表現し、グループおよびクラスにおける議論に参加する
社会参加と責任ある行動のための能力の育成 ⇒ *学校内外での経験を通した学習の促進*	他者の経験を考慮する力を養うために、想像力を使い、自身のものではない考え方について考察・表現し、説明する。また、学校内外の活動に責任を持って参加する。

こういったシティズンシップ力には、知識とスキルが必要である。特にスキルとして何が求められているのかを整理する。住教育の視点から必要である、「知識を活用して考える能力」を中心にシティズンシップ教育やその他の文献の中から抽出し、更にそれらを三つの要素に分けた。**図 2-1** にその概要を示す。

最終的には、大きく①情報を収集・分析して自分なりの見解をもてる力、②様々な立場の視点からものを見ることのできる力、③コミュニケーションをとり、周りの人々と問題に取り組む力、の３要素となる。図中英文で書かれているイギリスのシティズンシップ教育の中で最終的に身に付けたいとされるスキルと合致している。

これらの要素をもつ住教育では基礎学力を養う義務教育課程に行うことで、まちに関する知識を活用し、十分な討論が出来るようになると考えられる。

多角的に考えるための情報が入手できる状況をつくり、考えるきっかけを与えるような設問があることが、シティズンシップ力を高めるためには大事であろう。

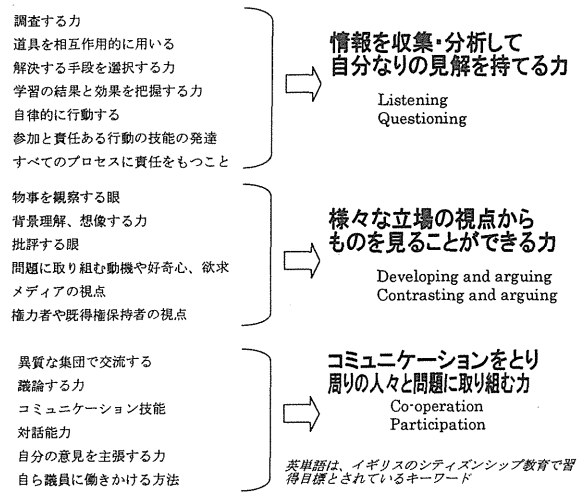

図 2-1　知識を活用して考える能力

3．教科書を通して見る日本の現在の住教育

3.1　日本の学校教科書で提供される知識

実社会の様子を多く学ぶ小学校の社会科（3 年生から 6 年生[1]）及び、身近な現象についての説明のある中学校の理科から、まちやまちづくりに関するキーワードを抽出したものが表 3-1 である。対象の教科書には交通、都市インフラ、まちの様子、産業、環境、災害などの多くの分野において、まちに関する単語が見られた。単語としての知識は豊富であるが、これからのまちや住居、都市のあり方などのまちづくりについて考えさせる題材はほとんど見られない。将来のまちの様子・開発について考える記述はほとんど見られなかった。制度や将来のあるべき住環境の姿を考える機会が教科書のみの学習では不足することがわかった。

3.2　スキルの教育－設問内容から－

1）小学校

東京書籍平成 17 年度版「新編新しい社会」３・４上、３・４下、５上、５下、６下の５冊での設問を整理する。見開き２ページが一まとまりの説明となっている。教科書内には調べ学習をする際のコツを説明するコーナーが少しずつ様々なページに掲載されているほか、投げかけも多い。設問に類するものとして、見開き２ページにおいて左の欄外には、そのページで説明する内容を確認するための設問がある。この設問を「確認設問」とし、その他教科書内の児童への投げかけを、表 3-2 に整理した。カンガエル等は蛙マークのついた囲み記事で、各々表内に説明したような役割を持つ。

「確認の設問」のは、知識の確認の意味合いが強く、答えは同ページの本文や資料に記載されている場合が多い。そこから答えを探しだすと、表 3-3 に示すように一面的な解釈を生み出すことが予想される。

表 3-1　小中学校の教科書のまちづくり関連単語

分類		小学校社会科(3・4年上下、5年上下、6年上下) 新編 新しい社会 東京書籍 (例)	計	中学校科学(1分野上下、2分野上下) 新編 新しい科学 東京書籍 (例)	計
交通	概念	車道と歩道の高さ、部品のリサイクル、段差のないホーム、人の安全、車の便利さ	7	枝分かれ、混雑した道、一本道、せまい道、交通機関	6
	交通施設	交差点、国道、横断歩道、高速道路、点字ブロック	28	アスファルト、ガードレール、高速道路、有料道路、レール	13
	交通機関	自転車、貨物輸送、移動販売車、カーナビ、ハイブリットカー	20	電車、飛行機、バス、リニアモーターカー、電気自動車	12
	交通システム		0		0
	小　計		55		31
交通以外のインフラ	概念	バリアフリー、ノーマライゼーションのまちづくり、水をよごさないこと、魚やのりへの影響、安い木材	23	市街、水田、塩田、田畑、扇状地	13
	公共施設	市役所、学校、花とみどりのまち推進センター、公共事業、寺	8	博物館、体育館、校庭、堤防、科学館	18
	水の確保	家庭排水、浄化センター、下水道整備、工場排水の規制、水の再利用	28	下水処理場、農業用水、生活用水、排水の設備、地下水	9
	エネルギーの供給	原子力発電所、送電線、変電所、燃料電池、ガソリン	22	化石燃料、地熱発電、石油貯蔵庫、光エネルギー、化学エネルギー	48
	ゴミ処理	家庭から出るごみ、会社から出るごみ、工場から出るごみ、缶瓶資源化センター、ごみの21分別、粗大ゴミ資源化センター	6	資源ごみ、ごみ焼却場、スクラップ、資源化施設、再生工場	6
	小　計		87		94
まちの様子	概念	家のあるところ、山に神社や寺が多い、未来に残したい日本の宝物、昔と今の道具の違い、地元で消費	14	騒音、目当たり、明るい場所、暗い場所、木かげ	21
	産業	工業地、埋立地、自動車工場、商店街、コンビニエンスストア	24	農業、漁業、化学工業、農業用水、湯畑	42
	共同	消火栓、消火器、防火水槽、避難所、消防団、消防団倉庫	6	ため池、里山、市民のいこいの場、防災体制	4
	住む	住宅、住宅地、大きな住宅、仮設住宅	4	土手、フェンス、建物、室温、ホームセキュリティーシステム	69
	小　計		48		136
環境	自然環境の問題	保全活動、地球温暖化、酸性雨、砂漠化、熱帯雨林の減少	25	ヒートアイランド現象、地球温暖化、温室効果、排気ガス、酸性雨	29
	森・川	森林、みどりのダム、白いダム、水源林、海と森林	40	扇状地、三角州、階段状の地形、土地の段差、熱帯雨林	72
	災害	台風、火事、地震、洪水、冷害	14	がけくずれ、落石、地すべり、洪水、豪雪	22
	現象		0	ダイアモンドダスト、朝なぎ、夕なぎ、雷雲、にじ	30
	小　計		79		153
制度	住環境	家や店のおおいところ	1	家電リサイクル法、リサイクルマーク、プラスチックの分別、分別回収、法的整備	15
	産業	高い建物の多いところ	1	臨海工業地帯	1
	防災		0	浸水想定区域図、マグニチュード、震度、震源、震央	9
	伝統		0		0
	道路		0		0
小　計			2		25
総　計			271		439

表 3-2　設問の分類と例題

設問の種類	例	件数 学年	件数	計	内容
確認設問	田や畑が多いところは、どんなようすなのでしょう。	3 4 5 6	25 48 47 21	141	教科書中央左端の本文が始まる部分の隣に見開き１ページごとに記載されている。文の調子は問いかけ型であるが、学ぶテーマのサブタイトル的な役割を果たしている
クイズ	どうして田や畑が多いのでしょうか?	3	4		３・４年生上の教科書のみに記載されている設問。「なぜ（どうして）～なのかな」という投げかけ方。
カンガエル	あと一つ、世界遺産を登録するとしたら、あなたは、どこの何をすいえんしますか。	3 4 5 6	6 25 17 4	52	カエルのマークとともに本文外にところどころに記載されている。「考えてみよう」「やってみよう」「調べてみよう」という文調である。
オキカエル	あなたの県の冬の行事を調べてみましょう。	3 4 5 6	1 3 9 8	21	教科書に記載されていたことについて、自分の環境に当てはめて考えさせる。“こんなことを調べてもいいよ”と説明されている。
チャレンジ	世界遺産について考えよう（情報収集、考えを話し合う）	3 4 5 6	3 5 2 2	12	欄外にカンガエルのように示される。話し合いや情報収集のテーマを示す（例１に実際の例を記載）

表 3-3　テーマの設問から予想される一面的な解釈例

設問例		教科書の内容と解釈
「どうして赤石川の水は美しく水量も多いのでしょう」	設問がかかれているページから導いた答え	ぶな林の原生林が養分を含んだ美しい水を流しだしているから
	その他の答え	川に産業が発展しなったため、雨が多く降るため
「十勝の自然は、私たちにどんなめぐみを与えてくれているのでしょうか	設問がかかれているページから導いた答え	じゃがいも栽培などの十勝の気候に合った農業の発展。食料自給率が高い 自然が多いことを利用した観光産業
	その他の答え	スケートや氷祭の開催(前頁に記載あり)

調査や資料の分析をし、まちについて自分の意見をもたせることがスキル教育において重要であるが、それらを目的とした設問は、主に、クイズやカンガエルやチャレンジの部分に見られた。それらを設問の目的ごとに分類し表 3-4 に件数を示す。大きく分けて①情報の扱い方を学び、探し出し自分の考えを深めるための設問と②意見交換を行う準備として自分の意見を持つための設問が見られる。

表 3-4　分類ごとの設問の数

		情報の扱い方の設問			意見をもつための設問	
		情報の分析・背景の理解の基礎となる問いかけ	情報収集を促す	情報の分析・背景理解を促す	自分の意見をもつように促す	周りの人々と意見の交換を促す
		比較・整理・作業してみましょう	調べてみましょう	考えてみましょう・挙げてみよう	あなたなら	話し合ってみましょう
カンガエル及びクイズ	3・4 上	5	0	11	0	0
	3.4 下	10	9	2	2	0
	5 上	0	6・	1	1	1
	5 下	1	4	1	1	1
	6 下	2	1	0	1	0
チャレンジ*	3・4下	●	●	●		
	5 下	●				●
	計	18	20	15	5	2

表 3-5　中学校社会科教科書内の設問等

設問・働きかけ	特徴（例）
確認の設問	各説明の確認
スキル・アップ	計・資料を用いて考えるための方法について書かれたコーナー
「学びのひろば」	調べ学習での調べ方やまとめかたといった方法について紹介 例：比較や関連の視点から調べるポイント②　1身のまわりのもので、外国でつくられたものがあるか調べる　2食べ物や習慣などのなかで、外国から来ているものを調べる
ピンマーク	学習を深めるのに適した活動を紹介する 例：日本の位置を地球儀などを使って説明してみよう 中国は世界最大の小麦の生産国です。しかし、多くの農作物を輸入しています。その理由を考えてみましょう。

高学年になるにつれて学ぶ知識も多くなるが、設問が少ないために自分の意見をもつまでに至らないのではないかと考えられる。

本研究で用いた社会科教科書には、情報収集や分析に関する多くの設問がみられた。しかし、今後まちづくりの担い手となる小学生に対して自分の意見をもたせる設問は少なかった。

2）中学校

東京書籍の教科書を見ると（表 3-5）、社会科の教科書でも、小学校と同じような傾向が見られる。テキストの学びのポイントを確かめる設問や、調べ方の紹介はあっても、現在の社会への批判も含めた多様な考え方を考えるような仕掛けとはなっていない。

3.3 日本の教科書の設問の特徴

シティズンシップ力を培うという視点で日本の教科書を振り返ると、知識は幅広く掲載されているが、都市像や制度といった抽象的な概念は充分ではない。現在の制度や体制とは異なる考え方のヒントは殆ど見られない。

スキルの育成に役立つ情報収集方法についてもある程度身につくようになっている。しかし、設問の内容は、教科書にかかれていることを確かめる程度のことが中心であり、自分自身の考えを深め、現状の社会批判も含めた、様々な考え方や幅広い知識をもった上で議論する、シティズンシップのスキルを育むような設問設定は充分ではないことがわかった。

4．各国のシティズンシップ教育・住教育の概況

4.1　シティズンシップに類する特徴的な教育

北欧諸国では、社会に出て生きていくための力を育む教育が行われている（表 4-1）。北欧閣僚評議会の出した「北欧の消費者教育」では、生徒がテーマを決め、新聞や雑誌、研究報告書、訪問調査、実地調査、関係機関との接触など多岐に渡る情報収集の方法を学びながら、収集した資料の分析、評価をし、様々な方法を用いてらテーマを追求するスキルの育成までを目標とする。

スウェーデンの社会科教科書では、学習目標を民主主義の価値観を身につけた市民の育成としている。基礎学校９学年時に達成される目標は、民主主義の理解に始まり、さまざまな知識の源泉を利用し、集めた情報を統合、加工、検討、評価ができるといったスキルの目標までが設定されている。授業は、テーマについて調べ自分の意見をもち、議論により深めていく学習となっている。

デンマークには、フォルケオプリュスニングというグルントヴィの教育思想が根付く成人学校がある。フォルケオプリュスニングは、人々が対話と相互作用を通じて、共同性・歴史性に目覚め、人間の生の尊厳を知り、みんなとともに生きることに覚醒、自覚するといった意味をもっている。これはシティズンシップの育成にもつながる。書物では学べないことを立場の違う者の対話によって学ぶことを重んじている。

表 4-1　シティズンシップ教育と類する方法

書名	内容から読み取れる教育の目標	教育の特徴・内容
北欧の消費者教育「共生」の思想を育む学校でのアプローチ（北欧閣僚評議会）文11	共生のための価値形成に焦点。持続可能な発展を目的とし、消費者態度の転換によりその実現を図ろうとする。 消費者教育と環境教育を連接し体系化されている。	家計、消費者の権利と責任、広告と影響力、消費と環境、食育、製品の安全性と生活上の安全など、消費者としての立場での権利と責任について
あなた自身の社会スウェーデン（社会科教科書）文22	「正答がない問題についてクラスで討論しながら、主体的に自己選択・自己決定できる人を育てている。「社会」の学習目標を民主主義の価値感を身につけた市民の育成としている。	犯罪、警察、裁判所、暴力、犯罪者厚生施設などの法律と権利、人の役割、若者によくあること、麻薬、アルコールの被害など。家族の経済、消費者教育関係、コミューンの役割。 教科書は、建前や盛られるを述べるのではなく、事実を客観的に描き、子どもに情報提供して、議論し判断させることを繰り返している。
フォルケホイスコーレ（デンマークの民衆学校）文12	人々が対話と相互作用を通じて、共同性・歴史性に目覚め、人間の生の尊厳を知り、みんなとともに生きることに覚醒、自覚させる。	① 母国語（生きた言葉）で語りあうこと。 ② 同輩のもの、同じ階級ではないもの同士の対話から学ぶ。 ③ 北欧神話や民衆伝承、あるいは祖国の自然を歌った詩を使い、人間性を高めていく教育。 ④ 試験の廃止

4.2　授業科目としてのシティズンシップ教育への取り組み

イギリスでは、政策として一斉にシティズンシップ教育が導入されることとなったが指導方法は、各学校の裁量に任せられている。大きく表 4-2 に示す三タイプの導入方法が見られる。十分な数の専門教員が育っていないこと、また進学系の高校では大学への進学のための科目の教育が重視されることなどから、まだまだ十分な教育内容となっていない学校が多いとのことである注3)。

それを補うために、カリキュラムを解説した冊子を発行し、教育現場の教員が様々な科目とのリンクの中で取り組めるようなもの文13) を発行しているほか、インターネットからダウンロードできる教材も数多く用意されている。指導方法は各学校、教員によって様々な手法が取られており、より質の高い教育を目指して発展中である。評価方法については、客観的・主観的評価や記述試

験の方法と添削方法などに関する詳細なガイドブック[文7)]が出版されている。

表 4-2　シティズンシップ教育の取り組みタイプ

タイプ	概説
クロスカリキュラム型	クロスカリキュラムの中に組み込む方法である。シティズンシップ教育の内容が既存の教科領域と重複する点があるためにこのような方法が可能となっている。ただし、専門外の教員が手探りで指導法を考察しなくてはならなかったり、教科部門が独立して存在する学校の場合には共同で研究する機会に乏しいという制限もある。
独立教科型	独立した教科としての導入ものである。最も明瞭な方法だが、新しい教科なだけに専門教員の不足という問題がある。
全学取り組み型	学校全体を通した導入を試みるものである。例えば模擬選挙の日を設けたり、地域のプロジェクトに参加するなど、学校全体の行事を通したアプローチ方法である。

4.3　社会全体での住教育－フィンランドの教育環境－

1）明日の市民をつくる学校教育

PISA[注4)]で学力世界一と注目されているフィンランドでは、その背景の一つとして、「社会構成主義的学習概念」[注5)]を挙げ、「知識とは、主体が探求するものであり、社会的な脈絡の中で作られるものである」という考え方を示している[文8)]。これはまさにシティズンシップ教育に通じる考え方であり、「批判的かつ革新的な」考え方を育てることで、責任を持つこと、参加すること、意見を提示すること等に重点を置いている[文9)]。フィンランドメソッドでは、目標達成のために、1. 発想力、2. 論理力、3. 表現力、4. 批判的思考力、5. コミュニケーション力の５点を、育んでいると北川[文10)]は指摘する。

授業では、先生との対話を通して、一人一人が自分の心の中にある考えを整理し、自分の意見をまとめられる練習を先ず行う。特に「何故？」という言葉をよく使い、考えを深める訓練と、その考えを表現する訓練を積む。このようにして他の人と議論するための力の基礎を築き上げ、スキルが育まれている。

1998 年には、建築政策[文2)]が政府より提示され、建築教育が学校教育でも積極的に取り上げられるようになった。特に美術の授業でその重要性は高く、それ以外にも環境教育も兼ねて、生物、チリ、歴史や政治の中で教えられるべきだとされている。

こういった教育を支えるために自治体が学校での教育をサポートしたり、まちに学習拠点が整備されたりしている。吉崎[注6)]によれば、よりよい環境を求める市民、建築家、関係団体、政治家等の努力で、人工環境教育が多くの学校で行われている。小中学校では、学校独自のカリキュラム作成権が与えられ、社会、理科、美術、その他の一般教科で人工環境教育を行うことができる。環境省は、住環境や建築などのマニュアル読本を作成し、教育庁は、インターネット上に教材を掲載している。

ヘルシンキ市都市計画局では、10 年余り前から、子どものための環境教育を実施しており、学校と組んだ独自のプログラムを開発している。 2004 年には、都市計画局と青少年事業センターの「子どもと家族政策年」で、多岐にわたる事業を展開した。

2）学校外での教育機会

ヘルシンキに次ぐ人口 20 万人のタンペレ市では、水力発電施設の一部に、都市環境センター“MOREENIA”[注7)]を設置し、多彩な展示を通して就学前のプレスクールの子どもから学べるようになっている。

ヘルシンキにある建築塾（Arrki）[注8)]では、3～18 歳の子ども約 200 人が通い、子どもの頃から、都市計画、地区計画、街区計画、設計と順を追って、楽しく学ぶ。体験的活動を通した建築知識の学習と同時に、ヘルシンキ市の都市計画コンペにも参加する等、実社会との係わりを持って活動している。

4.4　スキル教育の工夫

スキルを身に付けるために様々な方法がある(**表 4-3**)。シティズンシップ力を向上させるための取り組みとして特に熱心に方法を紹介していたのは、「北欧の消費者教育」であろう。ゲーム感覚でも消費者としてあるべき姿を学ぶ内容が多い。

情報を収集・分析・総合し、自分なりの見解を持てる力を養う方法としては、フィンランドの国語の授業で積極的に教えられているマインドマップやウェビングチャートは有効な手段であろう。また国際理解教育で頻繁に利用されるフォトランゲージも、視点・視野を広げられる効果的な授業方法であろう。

他の人の立場からものを見ることができる力を養うためには、ロールプレイ等が扱いやすい方法であろう。フォトランゲージも有効な手段となりえよう。

表 4-3　スキルを身に付けるための手法例

方法名	概要	養われるスキル		
		情報	立場	対話
マインドマップ	表現したい概念の中心となるキーワードやイメージを図の中央に置き、そこから放射状に 12 のルールキーワードやイメージを繋げていく.	○		
ウェビングチャート	中央に書いたテーマから広がるイメージを蜘蛛の巣状に書き出す	○		
部屋の四隅	部屋の四隅に「はい」「いいえ」「ときどき」「わからない」と書いた紙を貼っておき、ある質問に対して参加者が自分の考えのところに移動する。		○	
イメージマップ	個人にテーマについてイメージを書くよう指示し、隣の人と自分の描いたイメージマップを見せ合い、どんな共通点や違いがあるかを考えさせる。		○	
ランキング	ある課題について用意されたいくつかの選択肢を、良いと思うものから順に並べる。その過程で、他の参加者と比べながら議論するというものである。比較的短時間（20～40 分）でできる		○	○
フォトランゲージ	写真に写っている人の立場に立ち、その人がどんなことを考えているのか、何を訴えようとしているのかなど、想像してみることで、他者に対する共感的な理解の力を高めることができる。	○	○	
KJ 法	フィールドワークで多くのデータを集めた後、あるいはブレインストーミングにより様々なアイディア出しを行ったやその段階で、それらの雑多なデータやアイディアを統合し、カードを使ってまとめてゆく方法	○		○
ディベート	ある特定のテーマについて、「賛成派」と「反対派」の２つのチームが相互に論争を繰り広げ、「審査員」が勝負を判定する。	○	○	○
ロールプレイ	代表者を出し、グループ内での話し合いの内容に沿って、全員の前でそれぞれの役柄を演じ、意見を言う。合意形成をめざし、全員で話し合う。	○	○	○

スキルについての凡例：情報：情報を収集・分析して自分なりの見解を持てる力
立場：様々な立場の支店からものを見ることができる力
対話：ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝをとり周囲の人々と問題に取り組む力

コミュニケーションをとりながら、周りの人々と問題に取り組む力を育成するためには、先に挙げたロールプレイ等以外に、ランキングやプレゼンテーション技術の向上あろう。今回ヨーロッパを中心に整理を行った結果、ディベートを利用した教材は見かけなかった。ディベートが相手を説き伏せることを目指す“競技”として行われることから、シティズンシップ教育として、なじみにくいのではないだろうか。

5. シティズンシップ力を育む教科書の構成と設問

5.1 授業の構成

イギリスのシティズンシップ、フィンランドの社会科、スウェーデンの社会科の教科書を中心に約 10 冊の教科書の中から、特に都市計画に近い内容を中心に概要を整理し、設問を一つずつ訳した。

教科書の各章内の構成を確かめ、どのようなプロセスで生徒に考えさせ、スキルを身に付けさせようとしているのかを確かめた。作業にあたっては、教科書の構成を【知識の提供】【知識の確認】【自分自身で考える作業】【他者との議論】の４種類に分けて整理をした。その結果を**図 5-1** に示す。大きく①個人型（個人の作業のみで完結）、②ステップアップ型（知識の確認から個人での作業、更に議論へと順次展開するもの）、③個人フィードバック重視型（個人で考える作業を知識を提供しながら行い、最後に議論をするもの）、④議論重視型（一つの単元の中で何度も議論する場面が知識の提供を織り交ぜながらあるもの）に分けられる。

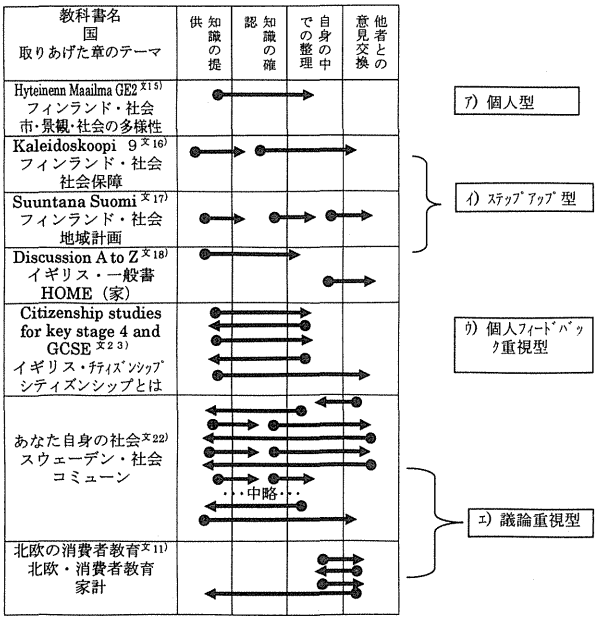

図 5-1　教科書の設問から見る考えさせ方プロセス

個人型の教科書はここに挙げた一冊のみで、他は最終的に議論をすることを重視しており、必ず最後に意見交換をし、自分の考えを深める設定を用意している。そのために、一人一人が、自分の言葉で考えを表現できるプロセスを重視している。

当然のことであるが、議論は様々な人が自分の意見を適切な情報・知識のもとに持つから成り立つのであり、議論を発展させるのに必要であろう十分な情報を提供しようと工夫されている。社会には様々な問題点があることや、一つの事象についても多様な見方ができるような知識を提供している。特に都市計画分野であれば日本では大学で教えるような都市モデル、土地利用計画の概説を行っている。教科書ごとにかなり取り上げる分野が異なるものの、非常に詳しく説明をしている。

5.2 設問の構成

北欧で使われている社会科系の教科書について、設問の内容を確認すると、いずれの教科書でも、大きく①知識の確認、②自分の中での理解を深める、③他者との意見交換、という３つの作業を行うように書かれている。

例えばフィンランドの地理について、地形や気象、社会保障、産業等多角的に学ばせる構成となっている Suntana Suomi の地域計画の章は、図 5-1 に示すような構成である。二部構成となっており、「知識の提供と確認」と「考えさせる設問」がある。知識の提供にとどまらず、その知識を活用し、プランの作成、話し合い、実生活に結び付けて考えるきっかけをつくる内容である。

「考えさせる設問」は８課題から構成されており、そのうち４課題が「情報を分析する力を養う設問」、４課題が「プランニング、議論をさせる設問」である。都市計画の知識を提供するばかりでなく、授業の中で児童が考えを深め、議論する時間を持ち、スキルを向上させる機会を提供している。具体的な計画案や、諸関係者の説明、自ら住むまちを振り返る等、教師と児童が共に学ぶことができる。

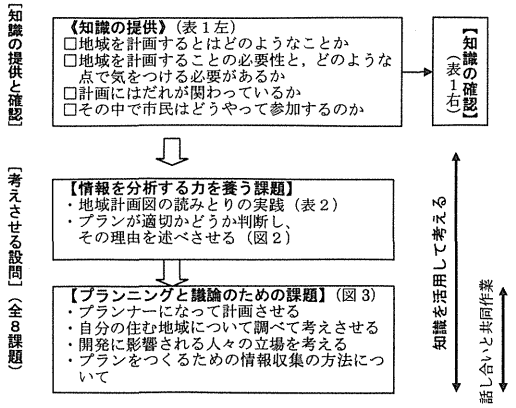

図 5-2　Suntana Suomi 第 19 章の構成と育成する力の対応

図 5-2 は、議論の練習のためのテキスト文16)で、図は、“HOME”をテーマにした生徒用ハンドアウト部分のコピーである。先ずは様々な家があることを紹介し（絵は海

外の様々な家）、HOMEの意義を考える素材を提供している。次に、キャンプ等の外泊経験を思い出させ、自分の実感を呼び起こしたうえで、社会問題に発展させ、植民地問題についても触れ、「あなたの国は他国を植民地にしたことはありますか？今でも植民地ですか？その人たちにはどういう権利がありますか？言葉は取り入れられましたか？」といった、議論のできる投げかけをしている。また「人々を繋ぎ止めるものは何だと思いますか？言葉、宗教？」といった、決して一つの答えの出ない、時には社会でも対立の原因となるような点についても積極的に議論をさせるテーマとして提示している。

段階的に思考を深めさせ、批判的な眼を養うことのできる構成・投げかけとなっている。

図 5-2　Discussion A to Z　生徒用ハンドアウト

5.3 具体的な設問内容

具体的な設問内容を、様々な教科書などから検討する。表 5-1 はそれらを整理した上で、代表的な質問項目を記載したものである。第２章で整理をした、スキル３種類のうちどれが身につくと想定できるかという点も加えて整理した。

知識の確認については、各々教科書内に書かれていることを読めばわかるようになっている。社会保障についての項目では、“一ヶ月に社会があなたに対して幾ら使っているのか考えなさい”という設問で、教科書にある図を確かめるようになっている[文14]。いずれも暗記して答えを言うには高度だが、テキストをしっかり読めばわかる。また質問内容自体も生徒自身が社会とどうつながっているのかを明確にさせるものであり、興味深い。

各々の考え方を深める「自分の中での理解」では、“人口はどのような方向に向かっているのか。そのことはフィンランドにどのような影響があるのか。私達は今後の人口の動向にどのように影響できるか。”[文18]といった設問である。教科書に答えはかかれていないし、そもそも答えのあるようなものでもない。生徒一人一人が教科書を参考にしながら、自分の意見をまとめる作業をすることとなる。

「他者との意見交換を促すための質問」では、ロールプレイの類で、牛小屋の開発について、具体的な地図や開発規模を示した上で、5－12 人が集まって、関連する様々な立場の役割を演じて、立地や大きさ、環境への影響について議論するものもある[文15]（図 5-3）。現実の社会への批評をしたり政策提言できる課題もあり、多様な意見を交換することのできる課題が多い。

牛小屋の開発（shelter for cows）
2000 頭の牛小屋を開発する必要があります。5 人から 12 人が集まり、役割を決めてパネルディスカッションをしましょう。
a）どこに立地させるのが一番いいですか？（p 155 の地図を見て）
b）アクセスはどこが一番いいですか？
c）大きさはどうですか？
d）環境への影響はどうですか？
やめるべきですか？縮小する方法はありますか？
＜登場人物＞
農家、環境問題の人、開発好きな人、動物愛護（権利）団体、屠殺場の人、商工会議所のような人、獣医、別荘の住民、隣人、有機農法に取り組む小規模な牛農家、サマーフェスティバルのコーディネーター（観光プランナー）、道路のエンジニア、県のディベロパー
（教科書にはそれぞれの立場や考え方の解説が５行程度載っている）

開発者だけでなくその場所に関わる多くの人を具体的に示し、その人の立場を考えた上でプランをどうするか話し合うための設問。

図5　牛小屋開発を設定された敷地

図 5-3　牛小屋の開発についての課題

ここまで紹介したように、諸外国の教科書の中では、知識を確かめ、更にそれを自分で深め、そして議論をする設問が用意され、必ずしも答えがはっきりしていなくとも、社会とのかかわりの中から問題意識を喚起するテーマを取りあげているという点で、興味深い。

表 5-1　設問内容

	質問項目例・【テーマ】	養われるスキル 情報	立場	対話
知識の確認	この１５０年間の間のフィンランドの人口にはどのような変化がありましたか【人口問題】[文21]	○		
	何人かの市民が“一般的な社会活動”に完全に参加するのがむずかしいのがわかるかもしれない２つの理由について説明してください。【シティズンシップとは】[文22]	○	○	
	コミューンとは何ですか。コミューンにおける住民の連帯とは何ですか。【コミューン】[文22]	○		
	一ヶ月に社会があなたに対して幾ら使っているのか考えなさい【社会保障】[文16]	○		
	都市モデルについて簡単に説明しなさい。【市・計画・社会の多様性】[文21]	○		
自分の中での理解	人口はどのような方向に向かっているのか。そのことはフィンランドにどのような影響があるのか。私達は今後の人口の動向にどのように影響できるか。【人口】[文20]	○		○
	もっとも貧しいコミューン３つともっとも豊かなコミューン３つは、デンマークの中でどこか？【自治】[文25]	○		
	Asemakara（詳細図）はより詳しいものです。ある地区の一部です。【地域計画－参加して影響を与えよう－】[文17] a）総合計画図ではわからない５つのことが、詳細図で詳しくわかります。（それは何ですか？） ・・・ e）子どもの遊び場を探しなさい。そのロケーションでよいですか。	○	○	
	自分自身の消費習慣や願望について、10 の形容詞を書き出す。（ヒントのためのリストで補助）【消費者の権利と責任】[文11]	○	○	
	初めて home から離れて寝たのはいつでしたか？どうでしたか？home にあるもので何が恋しくなりましたか？【HOME】[文18]		○	
	誰が一番力がありますか。ローマ法王、ﾘﾁｬｰﾄﾞ ﾌﾞﾗﾝｿﾝ、ﾄﾆｰ・ﾌﾞﾚｱ、・・・【シティズンシップとは】[文19]	○	○	○
他者との意見交換	クラスの人と、この宅地開発が経済、環境、人々の生活に与える影響について話し合う。【全ての人にとってより良い社会となるために】[文23]		○	○
	フィンランドの福祉モデルは危機的な状況にあり、我々は福祉関連費用を削減する必要があります。意見を出してください。【人口】[文20]	○	○	○
	次のことについて議論しなさい。 「フィンランドはいまだに階級社会である」 【人口問題】[文21]		○	○
	人々を繋ぎとめるものは何だと思いますか？言葉、宗教・・・”【HOME】[文18]		○	○
	スウェーデンは共和国になるべきですか。理由もつけなさい。【政治】[文24]		○	○
	2000 頭の牛小屋を開発する必要があります。5 人から 12 人が集まり、役割を決めてパネルディスカッションをしましょう。 a）どこに立地させるのが一番いいですか？ ・・・【地域計画】[文17]			○

情報：情報を収集・分析・総合し、自分なりの見解を持てる力
立場：様々な立場の支店からものを見ることができる
対話：ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝをとり、周りの人々と問題に取り組む力

2）スキルとの関係

また、スキルとの関係では、児童・生徒が独自に調べてこなければ答えられないものも多く、情報を得る練習となっている。しかも一面的な情報ではなく、多角的に情報を得、分析することが必要となる設問で訓練されると考えられる。

様々な立場の視点からものを見ることのできる力は、自分の中での理解を深める設問や意見交換の設問に多く見られる。

またコミュニケーションをとり周りの人々と問題に取り組む力は、現状の社会を批判することを前提としたような投げかけや、実際にまちづくりを行い対立する人間関係を提示した上で議論させるなど、異なる意見をまとめる難しさを経験できるようになっている。

5.4　シティズンシップ力を培う効果的な設問

設問は、知識をしっかりと身に付けた上で、自分の中で考えを深め、他者と議論するという大きく３つのタイプがあることがわかった。そして知識は異なる立場からの議論が可能な幅広いものを身に付けられるように工夫されている。そのために、現状の問題をふまえつつ社会のあるべき姿を、自ら考える機会を提供している。

情報を得て自分なりの分析をするトレーニングを行い、また批判的な眼を持って社会や自分の生活を振り返りながら自分の考えを深める機会を持ち、クラスメートとの意見交換をし、時には具体的な提案や取り組みを行う自分の住環境の改善に向けて繋げていくことができると考えられる。

児童・生徒が自ら考えながら学ぶプロセスが不可欠であり、義務教育課程でこのようなトレーニングを繰り返すことで、シティズンシップが定着し、そういった市民が社会人となることで、住環境を主体的に改善しようとする社会を創造することができるのである。

6．シティズンシップ力を育む住教育方法の提案と検証

6.1　実践授業の目的と構成

住教育に関する知識を身に付け、シティズンシップ力を高めるスキルを身に付ける授業の提案を行う。諸外国の教科書における設問と日本の実態との比較より、大きな違いは、“批評する眼”を持つ機会が無いということがわかった。そこで児童の生活に身近で、特に固定的な観念が強いものの、大きく発想を転換させる可能性を持つテーマを中心に、様々なスキルを身につける機会を持つ授業構成を提案する。そこで、**図 6-1** に示すように、“住環境を考える”を住教育テーマとし、“様々な立場の視点からものを見ることのできる力”を養うことを目的とした授業プログラムを作成し、12 時限分のテーマで作成した。スキルのうち、“批評する眼（批判的思考）”“背景を理解・想像する力”“問題に取り組む同期や好奇心”について意識的に取り組み、（**図 2-1** 参照）身につけるということに着目して授業の計画を作成した。２時限分を一まとまりとして５種類のテーマを扱うこととする。今回は実験的に 12 時限分のうち 2-3 時限目のみ実施した。

時限	授業の内容	知識	習得したいスキル（取り組み方）	
1	住環境概論			
2 3	道について ・様々な立場の利用者がいる ・道路は遊ぶ場でもある	道の利用形態の多様性	批判的思考	他者の立場に思いを馳せる 自分の意見を言う
4 5	緑について ・緑地の効果 ・里山の意義と維持	緑の効果他の生物との共生		他の生物の立場に思いを馳せる 仲間の意見を聞く
6 7	公園について ・公園の種類と役割 ・公園の運営	公共空間の管理運営	背景理解	自分の気がつかないところで働く人がいることへの理解
8 9	空気・水・川 ・汚染と浄化の歴史 ・空気・水の知識 ・経済活性化の恩恵と問題	水と大気の汚染解決方法		一つのことを解決するために、多くの人や組織の、考え方の変革が必要であることの理解
10 11	まちなみ ・集団としての価値 ・自分勝手にはできない	まちなみ保存活動	問題に取り組む好奇心	一人一人の行動がまちを変えることの認識
12	まとめ 議論しなさい。 「住環境向上のために、車依存生活をやめさせるべきか」			

図 6-1　シティズンシップ教育を兼ねた住教育プログラム案

6.2　実践授業の概要

今回の授業[注2)]では、道をテーマとし、身近な題材に対して議論を展開するということに焦点を当てた（**図 6-2** 参照）。福井市内の小学生を対象として行ったが、福井県は移動における自家用車への依存が全国トップクラスの車社会であり、子供達への交通安全教育に熱心に取り組んでいる。そのため、道路は車が通る場所であり、例え生活道路であっても路上で遊ぶことへの否定的考え方が大人にも子供にも強い社会である。しかし本来生活道路は、生活空間の一部として活用する可能性をも持つ空間であり、全く異なる考え方で見ることのできる空間である。こういった空間を対象とした授業を行うことで、批判的な眼を養う工夫についての検証を行うこととする。

1 時限目は、道についての知識を深め、様々な人・立場・使い方があることを認識することに目標を置いた。導入、レクチャー、様々な立場の理解と情報整理をグループで実際に作業しながら行うという３段階の展開をもって進めた。2 限目は批判的思考に基づく議論に目標を置いた。　授業は、議論のルールや課題の説明、グループごとに様々な立場から道に対する要望を書き出す作業、みんなで出し合った要望を議論してランキングを決めるという３段階の展開とした。

ここで、我々が特に注目した点は、議論を進めるにあたって批判的思考がなされることが重要であるというところであり、様々な立場の理解と情報整理を行うために、マインドマップからヒントを得た考案したフォトマインドマップ（**表 6-1**）を利用し、議論を深めた。これは議題にしたい場所の写真を撮影し、紙の中央部に貼り付け、マインドマップ作りを行うものである。

時間		内容	目標 知識	目標 スキル
1時限目	導入	児童に絵本を配る 教壇で絵本を読みすすめる □　絵本を通して道について考える 登場人物にはどんな人がいるか？／何をしているか？ その時はどんな気持ちで道を使っているか	道路の様々な利用法を知る	様々な立場にたって考える力
	レクチャー	道路についてのレクチャー □　様々な利用方法についての紹介 （日本、海外の事例をスライドで） □　本来あるべき道の姿（専門的に） 道の役割と種類、近隣住区の図など		
	考察・作業	ピクチャーマインドマップを用いて様々な立場から小学校の正門の前の道について考える（4人グループ） □　学校周辺の地図から利用状況を読み取る ①　現在既に利用している人 ②　現在利用していて困っている人 ③　現在利用していないけど、今後利用の可能性のある人 ＊　生活道路であれば、通行以外の機能があるはず ＊　障害者や高齢者、乳幼児も安心して歩けるか		
2時限目	議論の説明	課題説明と議論の注意 マインドマップ各立場の考え方を見ながら、学校前道路のありかたの議論（グループ） 【話し合い（議論）について】 □　「友達の意見を尊重する」ということに気をつけて話をする □　議論のルール 1)　他人の発言をさえぎらない 2)　話を聞くときは、話している人の目を見る 3)　どのような意見であっても間違いと決め付けない □　短い発言を心がけて、楽しく話し合いをする。 □　意見はマインドマップに書く		批判する眼を養うために、他者の意見を聞き、自分の意見との相違を考える力・対話能力―相手の意見を聞き、尊重する
	作業・議論・発表	作業　様々な立場から、要望を考える。 □　次に、それぞれの人のやりたいことが実現する為に、どういったようにこの道が変わると良いかを考えて、新しい道へのアイディアを出す。 □　「○○だから▲▲にしたい」 「道に砂場をつくりたい。なぜなら○○だから」 というように、理由も考えながら意見を出し合う。 議論　作業２で出た要望をランキングする 発表　ランキングの発表を通して様々な意見を共有する		
提出		□　宿題として振り返りシートを配布、後日回収 □　作業の成果を回収		

図 6-2　授業プログラム

表 6-1　マインドマップとフォトマインドマップの違い

	マインドマップ	フォトマインドマップ
議論への効果	・曖昧な記憶に基づいて語り合うことになる。	・実際の現場の様子がわかる。
	・発想・連想の自由度が高い	・撮影する角度により、議論のテーマにしたい焦点を意識した情報提供ができる。
	・テーマを共有化するための議論となる。	・テーマを共有しやすい現実的な話し合いができる
	・言葉で説得する力がつきやすい	・テーマの具体化ができる

6.3.　児童の理解と態度

知識の習得面では、車が走るだけの道ではなく、多様な使い方をしている例を写真で紹介した。この成果があって、表 6-2 のように、「道路の大切な役割を３つ挙げましょう」の質問への解答が、授業前後で変化する児童が半数以上見られた。これは、【批判的な眼】を培うための、知識が身についたと言えよう。

表 6-2　道路の役割についての解答変化

（児童３９人中）

	授業前に多かった回答例	授業後に新たに出た回答例	人
役割	歩く 走る 車が通りやすい	移動する 生活の場 安全で快適な生活を支える	16
人物意識	歩くため・走るため 自動車が通るため 自転車が通るため	車椅子が通る ベビーカーが通る 車・トラック・自転車が通る 老人が通る	6
間接的役割	車を走らせるため 交通整理のため 事故をおこさないようにするため	人が歩く・車が走る 自転車や車椅子ベビーカーなどが通る 地球のみんなが通りやすいこと	4

スキルについては、授業の中で指摘した【相手の意見を尊重する】ということができたと思うか、自己評価をしてもらった。39 人中 37 名が、うまくできたと自己評価している。実際の様子では、話し合いをするというよりは、意見を言いっ放しで、作業を進めるという状況が見られた。この点については、プログラムを急いだことも原因と考えられるが、他者の立場に立って考えることの難しさや、「話し合う」ことへの経験の未熟さが原因とも考えられる。スキルを向上させるためのプログラムづくりについては、別途詳細な検討が必要であることがわかった。ただ、通常このクラスを受け持つ担任の教員は、いつも以上に活発に議論をし、どの児童も集中して取り組んでいたと言う。プログラムの工夫で一層効果的な授業が可能であろう。

7．まとめ

住教育のためのシティズンシップ教育には、住まい・まち・制度といったことについての知識と、情報を収集・分析し、様々な立場の視点から考えることができ、周囲の人々と対話をしながら問題に取り組む力（スキル）が必要である。

学校教育で扱う教科書の中の課題設定において、こういった力をつけることは可能である。一つのテーマについて、様々な知識を確認させた上で、社会や自分を振り返って時には批判的な眼を持たせる設問を投げかけ、自分の考えを深めさせることが必要である。そういったプロセスを経ながら、答えがひとつとは限らないテーマの議論を行うことで、スキルは身につくであろう。諸外国の教科書からは、こういったスキルの教育方法を読み取ることができた。

日本の教科書で同様の設問が見られるようになるのは非常に難しいかもしれない。義務教育課程における教科書の意味付けによるところも大きく、また、現状の社会批判を子供達にさせることを恐れない教育者の心構えがなくては実現しないかもしれない。

テロ・アウティオ[注9)]は、「教員養成課程では、グループ討論を通して、自分の傾向を自覚し、他者の異なる意見を取り入れ、教育の本質を学ぶ。そして、必ず別の方法（代替）があるということを認識することで、現在の教育方針を批判することさえある。これらは、教師という仕事の柔軟性と専門的な自由を生み出す。さもなければ、学校は非常に官僚的になってしまうだろう。」と述べている。

シティズンシップのスキルをマスターさせるためには長い道のりが必要であろう。しかしシティズンシップ力の育成を含めた住教育を行うことの重要性を今実感しており、今後とも取り組みを続けることが、将来の日本の住環境の改善に繋がると信じている。

＜注＞

1)　ヒアリング調査は、2007 年 3 月～4 月にかけて英国及びフィンランドで実施した。調査員と実施時期については下記のとおりである。（担当者　加：加藤　水：水上　薬：薬袋）

		主たる訪問先	担当
イギリス	3/21	Stratfor 小学校 Laura McInerney 先生ヒアリング	加薬
	3/22	Andrew Peterson 先生ヒアリング (Cantabery Christ Church University)	加薬
	3/23	Barton Court School 小学校 Rebecca Skinner 先生ヒアリング	加薬
	3/25	Ian Davis 氏ヒアリング	加
フィンランド	3/26	ヘルシンキ工科大学 Timo Heikkinen 氏ヒアリング	薬
	3/27	HELKA ヒアリング	薬
	3/28	Tapiola 図書館ヒアリング	薬
	3/29	Laagstadue 小中学校授業見学 Lauttasaarin 高校ヒアリング	薬
	3/30	Asuntosaatio ヒアリング	薬
	3/31	教科書購入	薬水
	3/26	タンペレ大学教育学部ヒアリング	水
	3/27	アレクサンテリエ小中学校 タンペレ市教育計画担当ヒアリング	水
	3/28	ムオティアラ保育園 タンペレ私立図書館	水

2) 住教育研究会の協力に了解していただいた福井大学付属小学校の５年生を対象に、2007 年 10 月 3 日に 2 時間にわたって実践授業をさせていただいた。45 分授業の 2 時限分 90 分の授業を実施した。

3) I. Davis 先生（2007 年 3 月）へのヒアリングより

4) PISA: Programme for International Student Assessment、OECDによる国際的な生徒の学習到達度調査 義務教育の修了段階にある 15 歳の生徒を対象に、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー、問題解決を調査するもの。1997年に始まり、3年ごとに実施。PISA2003 読解力では、フィンランド第１位に対し、日本は第 14 位。

5) 「社会構成主義的学習概念 socio-constructivist learning conception 」（フィンランド教育省“フィンランドが PISA で成功した背景” 2004 年 12 月 7 日）

6) 建築家吉崎恵子さんへのヒアリング(2007 年 3 月)及び参考文献２）より。吉崎さんはヘルシンキ市都市計画局に勤務、建築家でもある。建築教育への取り組み経験もある。

7) 都市環境センター“MOREENIA”は、タンペレ市の電力を２つの湖の落差により賄う水力発電施設の一部に設置されている。タンペレ市の廃棄物管理局、交通局、エネルギー局、水道局、環境保護局によって創設された。

8) 建築塾（Arrki）は、政府の補助金を受けて運営される、幼稚園児から高校生までの通う場である。建築家等が講師として放課後指導にあたっている。約 200 人が学ぶ。

9) テロ・アウティオ タンペレ大学教育学部教授とのｅメールによる議論より

＜参考文献＞

【住教育全般】

1) 妹尾理子、住環境リテラシーを育む－家庭科から広がる持続可能な未来のための教育、萌文社、2006 年

2) 吉崎恵子：「フィンランドの人工環境教育支援の現状」、日本建築学会“成功する建築・まちづくり教育支援活動とは”、2006 年

3) The Finnish Architectural Policy、 -The Government's architectural policy programme 17 December 1998

【シティズンシップ教育】

4) 水山光春（研究代表者）２００６「社会科公民教育における英国シティズンシップ教育の批判的摂取に関する研究」平成１６年度～平成１８年度科学研究費補助金基礎研究（ｃ）（１）研究成果報告書

5) クリックレポート

6) Davies、 I. (2006) Teaching and Learning Citizenship in English Schools. 平成１７年度社会系教科教育学会研究発表大会講演予稿。

7) The Qualifications and Curriculum Authority "Assessing Citizenship"、QCA、 London.、 2006

8) 福田誠治：競争しなくても世界一 フィンランドの教育、アドバンテージサーバー、2006 年

9) ヘイッキ・マキパー：平等社会フィンランドが育む未来型学力、明石書店、2007 年

10) 北川達夫：フィンランド・メソッド入門、フィンランド・メソッド普及会、2005 年

11) 北欧閣僚評議会編 大原明美訳 北欧の消費者教育－「共生」の思想を育む学校でのアプローチ新評論 2003

12) 清水満 生のための学校 デンマークで生まれたフリースクール『フォルケホイスコーレ』の世界 新評論 1993 年

13) Citizenship、 the National Curriculum for England 、Key Stage 3-4、 (www.nc.uk.net)、 Qualifications and Curriculum Atuthority/ Departmentofor Education and Employment、 1999 イギリスのカリキュラムガイド

14) Cabe education、 Getting out there... Geography and Citizenship local safari guide、 A teacher's guide to using the local built environment at key stages 3 and 4、Cabe Education、 2005

【教科書】

15) Juuso Antikainen、 Jukka Käyhkö、 Hanna Pohjonen、Pertti A. Puhonen 、、 Hyteinen Maalilma GE 2、Tammi 社、2005、年

16) Sari Halavaara、 Jha-Pekka Lehtonen、 Pirjo West 著、Kaleidoskoopi 9、Tammi 社、2006 年

17) Hannele Cantell 、 Heikki Jutila 、 Ilta-Kanerva Kankaanrinta、 Mika Tammilehto、 Sanna Vaalgamaa 著、Suuntana Suomi (Maapallo) 、WSOY 社、 2006 年

18) Adrian Wallwork、 Discussions A – Z advanced、 A resource book of speaing activities 、 Cambridge University Press、 1997

19) Tim Holden-Rowley and John Blewitt 、 AS CITIZENSHIP、 Hodder Murray、 2004

20) Juhana Aunesluoma 、 Esko Heikkonen 、 Matti Ojakoski 著 、Lukiolaisen Yhteiskuntatieto、Werner Söderström Lsakeyhtiö 社、2006 年

21) Kauko Hänninen、 Markku Liuskari、 Jorma Suonio 著、ＦＯＲＵＭ Yhteiskuntatieto 、OTAVA 社、2005 年

22) アーネ・リンドクウィスト、ヤン・ウェステル著 あなた自身の社会 新評論 2005 年

23) Terry Fiehn、 Julia Fiehn、 Andrew Miller: This is ...Citizenship Studies for key stage 4 and GCSE、Hodder Murray、 2003

24) Hans Almgrem 、 Reflex 、 SAMHÄLLSKUNSKAP FÖR GYMNASIESKOLAN、 A-kurs plus、 gleerups

25) Nels Lysholm 、 Karsten Møller 、 IND I SAMFUNDSFAGET、Grundbog A 8-9 klasse、alinea

26) Democracy Cookbook、 www.dopolitics.org.uk

＜研究協力者＞

荒井 紀子 福井大学教育地域科学部教授
浅野 尚美 福井大学教育地域科学部附属小学校教員
Lisa Knutti ヘルシンキ工科大学
Andrew Peterson カンタベリー・クライスト・チャーチ大学
Ian Davis ヨーク大学
若林 佳枝 福井大学大学院工学研究科
堀江 みどり 福井大学大学院工学研究科
堤 秀人 福井大学工学部